

---

# せみ少女（仮）

雨宮 透子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

せみ少女（仮）

### 【Nコード】

N7679M

### 【作者名】

雨宮 透子

### 【あらすじ】

人類は衰退しきり、自然が支配するようになった星。

僕は偶然森で白いワンピースの少女に出あった。

そして少女の細く白い手と僕の手をつないだ時、物語は始まった。

## 目覚めのプロローグ

彼女と出会ったのは、ちょうど夏の初めだった。

《真夏の中で君と手をつないだ。》

蒸し暑さに目がさめた。

そこは黒一色だった。

わけがわからず、まばたきをする。

熱い。

なぜか体が思うように動かない。

頭が痛くなる。

私はどこにいるのかしら。

考えてみるがわからない。

思い出せない。

何も。

ただ、ここから出なければと思った。

何が起こっているのかわからない以上、外に出て把握しなければならぬ。

水はあるだろうか？

喉がかわいた。

風は吹いているのだろうか？  
体が疼く。

陽は輝いているのだろうか？  
恋しい思いに駆られる。

全てを感じたい。

この体を、この五感を、太陽と風の元に晒したい。  
行かなければ。早く、行かなければ……。  
どうして？

どこへ？

わからないが、今動かなければならない。  
今すぐにだ。

本能が、そう叫んでいる。魂が光を欲している。

「行かなくっちゃ……」

思いが言葉になった。

口が動いた。

我武者羅になつて四肢を動かす。

固い何かにすぐぶつかる。

がんがんと叩く。

手が痛い。

痛いと感じることさえ、今は感動に変わる。

出たい。ここから出たい。

出なくては。

必死にもがいて暴れてぶつけた。

## 目覚めのプロローグ（後書き）

プロローグです。

よろしければ、最後までお付き合いくださると嬉しい限りです。  
どうぞよろしくお願いいたします。

## 孤独な僕と見知らぬ少女。

僕はすることも得に無く、いつもぼんやりと森ですごしていた。  
この所、ずっとこうしている。

岩に腰かけ、ただ何も考えずに眺めているだけ。  
危険ではあったがいつのころからかグループの中に居辛いと感じる  
ようになった。

両親は死んでしまった。姉は他のグループの人間と結婚し、出てい  
った。

ひとりぼっちになった僕を真剣に心配するものはいない。

廃墟が森に飲み込まれている。

ビルや道路は草木に覆われ、眼下は緑でうめつくされていた。

人類はもはや種族存在が危機的段階にまで追い詰められている。  
他の動植物たちは様々と進化し続けるのに対し、人は退化してい  
くばかりである。

いずれ猿に戻るのかな。などと考える。

それも悪くはない。

森の中を自由に駆け抜けられる。  
ただ生きることを考えるだけでいい。羨ましいものだ。  
ふざけた考えに笑いがこみ上げてくるが笑えない。

人類は過ちを犯しすぎた。

天罰が下った。

それは何百世代にも人類を苦しめる呪いとなった。

データベースに残っていた資料を基にした情報なので本当かどうかは知らないが。

祖先は戦争というものでほぼ死に絶え、僅かに生き残ったのが僕らである。

人間が人間を殺しあっていたなんて想像がつかない。  
喧嘩することはあっても、殺したりなんかしない。

そんなことをするのは低脳な動物たちだけだ。

この岩の下にも何百という数の人が埋まっているはずだ。  
何度も壊し、何度も造り、何度も壊された。

この星はきつと人間の骨で出来ているに違い無いと思う。  
そんなことをみんなの前で言えば殴られるだろう。

だからここに一人ひっそりとたたずんでいる。  
群れに慣れられないはみ出しもの。

帰っても誰も待っていてくれるわけでもない。  
それでも生きるために、一生懸命群れるしか道は無かった。

後ろに気配を感じ、慌てて腰銃に手をやる。

そのまま後ろを振り返ると、そこには見知らぬ人間が立っていた。  
それも少女だ。

知らない顔である。

違うグループの人間だろう。

はぐれてしまったのだろうか。

ふらふらと歩く足元は土で汚れている。

少女は乾いた唇を僅かに動かし呟いた。

「水……」

僕は啞然とし、とつさに答える。

「川ならすぐそこに」

と、指差そうとした瞬間、ぐらりと少女の体が傾く。

僕は慌てて少女の体を受け止める。

声をかけてみたが反応が無い。

しかたなく見知らぬ少女を背負い、小さな川辺へ向かう。  
とても軽かった。

とにかくあわてていて、何も考えずに走った。



## 名前

川辺へつくと少女の体を日陰に寝かせる。

水をすくい、彼女の口元へ零した。

すぐに少女は気がつき、瞬きをくり返した。

綺麗な丸い瞳だ。

ゆつくりと座ると、きよろきよろと辺りを見回していたが、

川を目にとめると驚くほどの勢いで水をむさぼった。

しばらくの間水から離れようとはしなかった。

僕は水に顔をつけている彼女を見ながら考えた。

どこかのグループからはぐれたのだと思うが、この先どうすればいいのか。

年は同じぐらいだと思われる。

白いワンピース、長い髪、なめらかな肌。

彼女はまるで絵画の中から抜け出してきたような少女だった。

夏の乾いた風が髪をさらっていく。

僕はその時になって彼女の薄着に気がつく。

慌てて川の中へ入って着ていた上着を彼女の肩へかける。

こんな薄着では簡単に感染症や肺患いになってしまう。

「大丈夫？」

たずねると、僕の存在に気がついて水から離れる。

上着を握り締めながら口元をぬぐう。

何とも艶かしい。

「ありがとう」

柔らかい微笑み。

まさに恋に落ちた瞬間だった。

「っ困った時はおたがいさまだよ」

「ここはどこ？」

「え？」

小さな顔を動かし、不思議そうに観察している。

どこか上の空のようだった。

「ごめんなさい、その……私記憶が少しおかしくて……よくわからないことばかりなの」

「ここは廃墟の森。あ、そんな薄着じゃ体に障って危ないよ」  
ぱつと上着を投げ捨てる。

僕の声など聞こえていないようだった。

たたたと小走りに歩いていき、上を向いて目を閉じていた。  
直射紫外線の当たる危険な場所だ。

僕は注意しようとゴーグルをかけるが、思わず見惚れてしまう。

「ああ、なんて太陽がまぶしいのかしら。風もきもちがいい。森の鼓動が聞こえる」

ゆっくりと両手をかけ、陽だまりに立つ彼女は生命そのもののようだった。

僕は迷ったが、彼女を自分のグループへ連れ帰ることにした。  
本人も行き場がわからないのでかまわないと快諾してくれた。

「とりあえず上着を着ていないと危険だよ」

そう言い、さつき放り投げた上着を強引に渡す。

「でもあなたは？」

「少しぐらいなら大丈夫」

少なくとも彼女よりも体は頑丈だ。

直射日光も少しなら平気だ。

自分よりも彼女の方が心配でたまらない。

「優しいのね」

ふっくらとした唇で笑う。

どきつとする。何と返せばいいのか戸惑う。

「名前、なんていうの？」

僕は思い切って聞いてみた。

「名前……？」

彼女が驚いた表情に変わる。

しばらく彼女は考え込む。頭に手をやり、目を閉じる。

「……名前、覚えていないの」

「えっ名前を?!」

思わず聞き返す。

彼女は気まずそうに目線を反らす。

記憶喪失とかいうやつだろうか。

自分の名前を覚えていない不安さなんて僕にはわかりかねない。

「どうしてかしら…… なにかあったのに…… 思い出せないわ。どうして…… どうして……」

がくりとひざを折り地に手をつく。

「どうしたの？」

屈みこみ、彼女を見る。

大きな瞳から、ぼろぼろと大粒の涙がこぼれる。

落ちた涙は土がすぐに吸収していく。

「私は誰? どうしてこんな場所にいるの？」

どうして思い出せないの? 自分のことなのに、何も覚えてない。何もわからない。どうしてっ」

僕は彼女の肩を掴み、目線を合わせる。

「そんなに急がなくても平気だよ。しばらくしたらきつと思ひ出すよ」

「思い出せなかったら?」

不安な感情を隠さず、少女がたずねる。

動揺し震えている。

肩を掴む手に思わず力が入る。

「思い出せなくてもいい。無理しなくてもいい。後から思い出すかもしれないだろ？」

「そう…かな……」

彼女を立たせ、その手を引きながら歩き出した。

「でも名前が無いと不便だね」

僕が言うと、彼女は黙って頷いた。

「何か無いかな……グループのみんなに説明する時困るしな」

「あなたがつけて……私の名前……」

恐る恐る、彼女は僕を見る。

「君の名前を決めるなんて僕にはできないよ」

強く言うと、視線を反らす。

「じゃあどうすれば……」

語尾が聞き取れない程の小さな声で彼女は呟いた。

「……ユキ、はどう？」

「ユキ？」

真剣な目で見つめられる。必死さが伝わってくる。綺麗な瞳だ。

「その服の色、雪の色だから。って安直かな、ごめん」

「ううん。気に入った。私の名前、ユキ。ありがとう」

「本物の白い雪は見たこと無いんだけどさ」

照れ隠しで下を向く。

実際に吹雪く雪は汚れた色だ。

しかし、太古の雪は白色だったと習った。

「私も見たこと無い。こんな色なのね……素敵。名前ありがとう。すごく嬉しい」

にこつと笑う。

僕の心臓は今にも破裂しそうだった。

## 変化

ユキはすぐにグループに向かえ入れられた。

他の女性たちに連れて行かれ、僕はリーダーに彼女の身元を聞かれた。

正直に答えた。

大人たちは話し合った結果、ユキは他のグループからはぐれてしまったのではないかということだった。

元のグループに合流することはおそらく不可能だろう。

これからはこのグループと共に行動することに決まった。

しばらくすると、ユキが走ってくる。

僕に真正面からしがみつく。さすがに驚く。

「どうしたの？」

「わからないけどあの人たちが怖い……」

そう言った彼女は、白いドレスの代わりに茶色の薄汚れた服を着、髪が中途半端に切られていた。

グループの女性たちと同じような服。

長くて綺麗だった髪は無残に切りっぱなされている。

僕は驚いてどうすることも出来ない。

段々人が集まってくる。ユキの掴む手が強くなる。

すぐに二人を中心に輪が出来上がった。

「乱暴なことしないでください！」

そう言うと、中年の女性が怒って出てくる。

「あたしたちや何もしてないよ！わざわざ動きやすい服をやっただ

けじゃないか！」

「髪切ってあげようって、親切心でやってるのになんか文句あるわけ?!」

そつだそつだと女性人たちが口々に言う。

確かにあの服では動きづらいし、長い髪は手入れが大変だ。

グループの普通の女性はみんな地味な色の服をまとい、髪は短く切っている。

過酷な環境下では妨害服でなければ死んでしまつし、長い髪は邪魔なだけだ。

しかしユキに納得するように説明が出来ない。

僕はユキの流れるような髪が好きだった。

「後は僕が切ります」

じろりと睨まれるが怯まない。

「ちゃんとやるんだよ！」

「はい」

そう言うのと、女からハサミを奪い、ユキの手を握って走りだした。

他の誰かが切るくらいなら僕が切りたい。

少しでも綺麗に切りたい。

僕はその時違和感を少し感じた。

なぜかはわからなかったが、何かがおかしいような気がした。

ユキは沈んだ表情のままで、僕は森の川近くまで行き座らせる。

知らない人に囲まれ、服を強引に着せられ、いきなり髪を切ろうとされれば誰だってパニックになる。

もっと気を配るべきだったと僕は反省する。

ユキは記憶が無く不安でまだ慣れていない。

側にいるべきだった。

今はまだひとりにはいけない。

後ろから声をかける。

「じゃあ、切るよ」

僕はなんとかそう言い、ハサミを握る。

「……切らないで」

ユキは小さな声でそう呟いた。

僕は心臓が痛かった。

僕だって、本当に彼女の美しい髪を切りたくなんかない。

彼女が悲しむ顔なんて見たくもない。

いつだって笑って欲しい。

グループに慣れて、一緒に生きたい。

彼女を、彼女を苦しめるものから守りたい。

髪を梳かしながら、僕は迷う。

グループの決まりは守らなければならない。

絶対条件だ。

「でも切らないと帰れないんだ」

「……あなたも他の人と一緒なの？」

「僕は、君のこの髪好きだよ」

そう言い、髪を指で梳く。絹のように柔らかでさらりとしている。

「あなたも私が頭のおかしい人だと思う？」

「思わない。少し記憶が無いだけ」

すぐにそう返すと彼女は振り返る。

するつと髪が抜けていく。

「どうして私にそんなに優しくしてくれるの」

僕は言葉が詰まった。

どうしてか。答えは、彼女が悲しむのを見るのは耐えられないからだ。

「どこの誰かわからない私をどうしてかばってくれるの？  
いつ記憶が戻るかもわからないし、戻らないかもしれない。

私をかばうと、あなたの立場も危ういのはどうしてそこまでしてくれるの？」

早口に、切羽詰ったように彼女は聞いてきた。

好きだから、なんて言えない。

「そんなに優しくしないで。記憶が戻った時苦しいに決まってる。

あなたはきっと本当の私を知ったら置いていってしまう。そうでしょう？」

「そんなことはない！」

僕ははつきりと断言する。

「君が誰であろうと、記憶が戻ろうと、僕にとって君は君だ」  
言ってから、恥ずかしくて顔が赤くなるのがわかる。

彼女も頬を染めて静かに小さくうなずいた。

「ありがとう」

ユキはよく、僕に『ありがとう』と言う。口癖のようなものだ。

「髪、切るよ？」

「……うん」

「たぶん上手く切れないと思うから先に謝っておくよ」

そう言うとおかしそうに笑う。さっきまでとは大違いだ。

ユキの笑顔はとても可愛い。

「夏だし短い方が楽だよきつと。冬になったら伸ばせばいい」

ハサミを入れながら僕は言う。

「でもきつとあの人たち文句言う」

「そしたら僕が間に入ってなんとかするよ」

「さっきみたいに？」

「そう」

少しずつ切って行く。手先は器用な方だが、女性の髪を切るのは



初めてだ。

村の女性は長さがばらばらだったり、からまっていたりする。それが普通だ。

他の誰よりも良い髪形にしようと、僕は必死に切る。

その間は、二人とも無言でハサミの音だけがした。

僕は木陰の風が透る場所に並んで座った。

風の通り道。

さらりとユキの短くなった髪が揺れる。

ユキは首筋に手を当てて、目をつむって風を感じている。

結局僕は髪をあまり短く切れなかった。

それでも肩に少しかかるくらいまで切った。

白いうなじに惹かれる。

日焼けしていない白い肌、大きな瞳、潤った肌、整った顔立ち。幻のようにさえ見える。

そんな事を考えながらじっと見ていた僕にユキがきづく。

笑って、髪のリを言われる。

時間がかかったが、髪は綺麗に切りそろえられた。

ユキに似合うように気を使いながら少しづつ切った。

切り終わると、水面に顔をうつししばらく見ていた。

ユキは納得した顔で戻ってきた。

また「ありがとう」と言われる。

たいしたことはしていないのに。

僕らは時間を忘れて寄り添うように風に吹かれた。  
しかし時は止まることは無い。

少しずつ暗くなってきたはじめてことに僕は気がつき、帰ろうと言った。

ユキは気まずそうか顔をしたが、立ち上がった。

ユキがすつと手を出す。

僕は握り返す。

ユキは手を繋ぐのが好きだった。

置いていかないでね、と言って笑った。

不安なのだろう。

ところでこの違和感は何だろうか。

先ほども感じていたが、何かがおかしい。

考えるがわからない。

森を抜けしばらく歩くと、グループにつく。

ふいに後ろを振り返った。

ユキが不思議そうにこっちを見る。

そしておかしな事に気がついた。

ユキの方が僕より背が高かった。

おかしい。

初めて出会った時は、同じ年頃の少女だった。

繋いだ手も、ユキの方がしなやかで大きく、指が長かった。

そんなはずは、と彼女の顔を見つめると、にこりと微笑まれた。

その微笑みは少女のものではなく、女性のものだった。

僕は愕然とした。何が起こっているのかわからないが、彼女は僕よ

りもどう見ても年上だった。  
一体どうして……。

驚き、立ち尽くした。

## 成長

グループに戻ると、みんながユキの変化に気がついていていた。僕は女にハサミを返すが、全員が無言でユキを見ている。

最初にグループに紹介した時は、他のグループからはぐれてしまった身寄りの無い可哀相な少女だった。しかしもはやその枠を超えてしまっている。

少女というにはあまりに熟している。

彼女は一分一秒ごとに変わっていくことに、僕は気がついてしまった。

髪や爪はそのままだが、彼女は確実に成長している。ありえない。

それでも僕はこの状況をなんとかしなければならない。

ユキの手を引いて、使われていない住居に入る。

「どうしたの？」

声までも少し変わっている。

僕は途方に暮れた。一体何が起きているんだ。

彼女は何者だ？どうしてこんな急激に背が伸びたんだ？

それでも困惑を顔には出さずに笑う。

「なんでもないよ。夕食、君の分ももらってくるから待ってて」

「うん。ありがとう」

手を振って笑う彼女。

胸が痛かった。

僕はリーダーと話さなければならなかったため、配食場まで行く。

どう説明すればいいのかわからない。  
しかし相談するしかない。

僕が現れると、みんなの動きが止まる。視線を一身につける。  
覚悟はしていた。僕は言わなければならない。

「話、いいですか」

リーダーが食事をちょうど終えた所に話しかける。  
向こうもわかっていたらしく、食器をあずけて人の居ない方へ向かう。

少し歩くと、古く煙たいテントの前で立ち止まる。  
お互い無言のまま。

しかしこのテントの中の人物は知っている。

このグループの中で、代々伝承係を勤めている一族だ。  
香の匂いが鼻につく。

「相談がある」

外からリーダーが声をかける。

「あんたらが来るべきなのは今日じゃないよ」  
しばらくし、しわ枯れた声が返ってきた。

二人で顔を見合わせる。

そう言われても聞かなければならないことだ。

どうするかと戸惑っていると、中から答えが返ってくる。

「明日おいで」

そう言うつと、明かりを消してしまう。

真っ暗になってしまった。

取り付く島も無い。

しかたがなく、僕とリーダーは明日再び訪れるよう決めた。

そして、僕は後から後悔することになった。

次の日、僕は悲鳴で目がさめた。

隣で寝ていたユキの叫び声に飛び起きる。

どうかしたのかと慌てると、そこには僕の知らないユキがいた。

「どうして？ おかしいよね、変だよな？」

そう言い、おろおろと困り果てている女性がいた。

二十代の大人のユキ。服から手足が長く伸び、顔つきも変わっている。

すんなりとし線が細く、肌の白い美女。

大人が無理に子ども服を着たようないでたちだ。

へそが出てしまっている。胸元は窮屈そうだ。

さすがに僕は言葉に詰まる。

いくらなんでもユキの変化は早すぎる。

「私、他の人と違うみたい」

両手を見つめながら、声が震えている。不安を隠せない。

僕も動揺してしまう。

「そんな事ないよ」

気楽に言ってみせる。

嘘をついた。みんなゆつくりと年をとる。

こんなにも急激な成長をする人など見たことも聞いたこともない。そして彼女の変化が恐ろしい事に繋がることに気がついてしまう。

このまま成長を続ければ、彼女は……。

それとも丁度大人になった所で成長が止まるかもしれない。  
淡い都合の良い期待を持つてしまう。

一晩での変化に戸惑うが、僕はユキを落ちつかせる。

「今日、君のことを相談に行ってくるから安心していて。外には出  
ちゃだめだよ?」

無言でユキは何度もうなづく。

ユキを一人にするのは心苦しかったが、今の状態で外に出るのはま  
ずい。

僕は朝食を取りに行き、大人の女性用服が欲しいと申し出た。  
不審な目で見られたがそれどころではない。

渡されたぼろぼろの服と食事を持ち帰る。

「お帰りなさい」

「ただいま」

笑顔でむかえてくる。

ずっと一人だった僕は少し嬉しくなってしまう。

服を渡し、僕はいったん外に出る。

着替えたよ、と中から聞こえる。

正に大人の女性だった。

僕よりも一回り以上年上にしか見えない。

「ご飯だよ」

耳障りの良い綺麗な声。

僕はなんとなく目のやり場に困る。

「そうだね」

僕は誤魔化しながら、朝食をかきこんだ。





## 発覚

夕食後、僕はまたリーダーと落ち合い、老婆の所へ向かう。日が沈むまですっとユキの側にいた。

今外に出るわけにはいかない。

ユキには待っていて欲しいと告げた。

一番不安で怖い思いをしているのは彼女自身だ。

そんな彼女を一人ぼっちにさせるのは心配でたまらない。なるべく早く、理由なり解決策なりを知りたい。

そしてちゃんとユキに説明して、不安を取り除いてあげたい。その一心だけだった。

テントにつくと、足音で気がついたのか昨日と同じ声。

「入っただけで」

恐る恐る中に入ると、香で煙たかった。

目に染みる。

老婆の後ろに若い娘が二人隠れるようにしてこちらを見ていた。なんとも異様な雰囲気だ。

「そろそろ来るころだと思ってたよ」

そこに座りさないと言われ言うとおりにした。変な色の飲み物を出される。

一体何だろうと考えていると老女が口を開いた。

「人間もどきさ」

ランプの炎が揺れる。

飲み物を観察していた僕はその言葉にどきつとする。

まだ何も質問をしてもいないのに。  
もどき？僕には意味がわからない。  
確かに成長は早いが、いや、早すぎるが人間だ。

老婆はにやりと笑う。

彼女はずっと僕の目を見ている。

隣のリーダーには目もくれず、貫くように僕を凝視する。

「どういうことですか？」

リーダーがたずねる。

「人間によく似た動物だ」

「見たこともないのに？」

僕は思わず口をはさんでしまった。

グループではリーダーが権力を持つ。発言順位は僕は低い。

「見なくともわかるさ。あんたを見ていればわかるんだよ」

そう言い僕の目を指差す。

「人間もどきって、でも彼女は人間と同じですよ」

「いいや違うね。お前さんももうわかってるんだろ？あれが普通じゃないって」

僕は何も返せない。

老婆の言うとおりだ。

普通ではありえないスピードで成長している。

おかしいのは、十分承知だ。

「我々とは違う種族だってことさ」

またにやりと笑う。

違う種族？違うグループではなくて？

ぷはーと煙管を吐く。煙たくて目に染みる。

「大昔に、我々人間は違う星に生きていた」

「星？あの空にある星に？」

急に話の内容が跳んで僕は聞き返す。

あの無限のある星々のどこかに、僕らの祖先が住んでいたというのか？

ありえない。

先ほどからいいかげんな事を言っているようにしか思えない。

けれ老婆はもう笑ってはおらず、細い目で呟く。

「星が死んで人間はこの星に移住した……もうどれ程昔かはわからない程太古に」

そんなおとぎ話信じるわけがない。

「けれど人間とは愚かな生き物でな。また同じ事をくり返し争い合った。

そして奇跡的にも生き残ったのが今の人間さ」

笑えない話だ。

しかしリーダーは真剣に聞き入っている。

まさかこの老婆の言ったことを信じるというのだろうか？

「その女はこの星の天然生物だ」

天然生物？

僕はその言葉に衝撃を受ける。

まさかとは思っていた自分にも驚く。

「この星の生き物、つまり先住民さ」

「先住民……」

思わず口に出す。

「大地へ潜り、何年間も眠りつづける。

そして目覚めるとその姿は人間に良く似てるといっ

「なぜそんな事を知っている」

リーダーが聞いたです。

「長く生きたからねえ」

それでも余裕な顔でふはーと煙管をふかす。

「うちの一族の仕事は記憶を受け継ぐことだから」

きせるを一服し、また話しは続いた。

僕は啞然とするしかない。

ユキはどこか人と違う雰囲気を持っているが  
それが彼女の個性だと思っていた。

けれど、いつも違和感を感じていた。

何かが少しずれているような、そんな感じが。

他の生き物だなんて……

信じられない。

信じたくない。

頭を抱えて叫びたくなる。

「やっぱりそうだったんだ」

はっと後ろを振り返ると、ユキが笑顔で立っていた。

## 擬似生物

「記憶なんて、最初からなかったんだ」

震える声でユキが言う。

すでに成人と同じ程の容姿になっていた。

「そうさ」

僕が何か言おうとする前に老婆が答えてしまう。

「私は、他の人とは違うんですね」

にやり、とまた笑う。

「自分で自分のことぐらいわかってるだろ」

何も言えず言葉に詰まっているようだった。

助け舟を出そうとするが、何も言えなかった。

「そうさ。あたしらはお前さんとは別の生き物だよ」

「わたし、人間じゃなかったんだ……」

ユキは今にも泣き出しそうな顔で笑う。

そんな笑った顔なんて見たくない。胸が痛む。

「ユキ！」

「もう放っておいて」

「そんなこと出来るわけがない！」

あのあどけない少女は、もう僕よりもずっと年上にしか見えない。けれど、ユキはユキだ。

外見がどんなに変わろうとも、僕は……

「あなたのお節介なんてもういらない！」

怒ったユキを見るのは初めてなので僕は驚く。

しかしここで引き下がるわけにはもちろんいかない。

「私は人間じゃない！初めて会ったのがあなただったから一緒にいただけ！」

でもそれも全部、人間に混じるためにね」

「それでも僕は君が好きだよ」

何故か僕は落ち着いて、その言葉を口にできた。

「ばかなことを言わないで」

しかしユキは相手にもしてくれない。

僕の真剣な告白は簡単に踏み潰された。

「ユキ！ちゃんと僕の話をきいてくれ」

肩を掴むが、簡単に振り払われる。

「嫌よ。お願いだからもう二度と私と関わろうとしないで。」

私は一人でも生きていける。そうでしょう？人間じゃないもの。

あなたがいなくても生きていけるの。もう平気きなの」

「ユキ……」

取り付く島も無い。

「私は別にあなたじゃなくても良かった。

都合の良い人間だったんだたら誰でもよかったの」

「そんなっ」

「ただの勘違いだった。初めて会った人だからなっただけだったの」

吐き捨てるようにユキは言葉を続ける。

「『大丈夫』だよ。大人だから一人でも生きていける」

「人は一人じゃ生きていけないよ」

それでもユキは

「私、人間じゃないから」

にこつと、あの初めてみた笑顔と同じように笑う。  
僕は何も言い返せない。

無理をしているのがわかるのに、その笑顔が僕は大好きで、  
でももう一緒にいることが辛いと彼女は言って……でも僕は一緒に  
いたいのに

「違うよって、言ってくれないのね」  
はつと、その苦しい表情に驚く。  
悲しそうに、笑う。

「好きだった」  
そう言っただけは彼女がテントを去っていった。  
僕は動けなかった。  
止められなかった。  
理解できなかった。  
そして彼女を追い詰めてしまった。

後悔がどつと押し寄せてき、僕は立ち上がる。  
ユキの気持ちを考えれば、当たり前のようなことだった。  
愚かな僕は何も気づけなかった。

悪いのは全部僕だ。  
彼女を強引にグループに連れ込んで人間と同じように生活しようと  
した。  
それは間違ったことだった。

ユキは人間じゃなかった。  
だけど僕のこの思いは、変わらない。  
躊躇いも無い。

慌ててはだしのまま外に出るが、ユキはもういない。  
暗い中、足裏が痛んだが走った。

一生懸命走った。

彼女を追いかけた。

けれど、どこにもいなかった。

そんな時、急にがやがやと騒がしい方向に気がつく。  
何事かと人が集まっている所へいそぐ。

そこには不安げなユキがいた。

「ユキ！」

僕は大きな声で叫んだが、届かない。

グループの人間がユキを取り囲むように円になっている。

その時だった。

同じ年頃の少年が後ろからユキに近づいていた、手には大きなヤリを持って。

「ユキー！！」

声をしぼって叫ぶ。

はっとユキに僕の声は届いたようで、こちらに視線を向けようとした瞬間だった。

後ろから勢い良く、ユキの体が貫かれる。

衝撃で体が前に傾くが、ふらりと顔をあげる。  
その表情はどこか哀愁さを感じるものだった。



傷口からどろりと流れ出る白い液体。

そんな、と、信じられない

僕は啞然とする。

彼女の血の色なんて、知らなかった。

「やっぱりこいつは化け物だ！」

誰かがそう叫んだかと思うと、堰を切ったように

次々と物をユキに向かって投げつけ始めた。

僕は人をかき分けながら必死でユキの元へ近づこうとするが、人の壁が邪魔をする。

なかなか前へ進めない。

一生懸命前へ出た。

近くで何かを投げようとしている者に気がつき、慌てる。それでも止めることが僕には出きない。

拳ほどある石が、がつんと音をたてて頭にぶつかる。

傷口から出る液体が頬を伝っていく。

まるで涙のように。

僕はなんとか中へ入り込み、細いユキの腕を掴み森へ走り出した。

背中から怒号が飛ばされるが、気にしない。

後先など何も考えずに。

僕は衝動でグループから飛び出していた。

## 羽化

行き場など、考えていなかった。

とりあえず、初めて会った川岸で僕は足を止めた。

もうグループには戻れない。

十分わかっている。

でも、ユキが一緒なら、人間じゃなくても、側にいてくれるなら……それで生きていけると思った。

この手をにぎりしめて生きていけるなら、それも良いじゃないか。

「ユキ……」

振り返ろうとすると、厳しい声で言われる。

「見ないで！」

強い言葉に僕は振り返れない。彼女にもプライドがある。

しかしグスッと泣かれては、放っておけない。

「ユキ」

後ろを向くと、ユキの胴体からは白い液体がどろどろと流れ出し続  
けていた。

止める方法を僕は知らない。

そして声を押し殺して泣くユキ。

どうすれば…… いたい僕には何ができる？

何もユキにしてあげられない。

僕はただのちっぽけな人間で、彼女はこの星に住む天然生物で……。  
生きる世界が、違った。

それでも僕は、構わないと思った。

初めて会ったあの時から、僕はずっと彼女のことが好きだった。

例え同じ時間を生きられないとしても、僕は迷うことなくユキを選

ぶ。

僕は泣きじゃくるユキを強く抱きしめた。

ユキは驚いて固まるが、ゆっくりと肩に顔を押し付けてまた泣いた。体格は違っても、この女性はユキだ。

心はあの少女のままなのだ。何度も何度も頭を撫でる。

こんなに愛おしい気持ちになったのは初めてだった。

僕はもう二度とユキを離さないと強く強く、抱きしめた。

「うつ」

突然のユキの苦しそうな声。

どうしたのかと思い慌てるが、ユキは僕にしがみついて離れようとはしない。

しかし徐々にその声は増して行く。

何が起こっているのか僕にはわからない。

僕はユキをそつと離す。

顔を覗き込みたずねる。

「どうしたの？」

「背中、痛いの……」

「怪我してるんじゃないかな、見せてみ」

「っ違う！」

そう言うと、ふらふらとしながらも川へと歩みよっていく

強い否定に何かがひっかかた。

ユキの体が心配だったが、とりあえず水分をとっているようで安心してた時だった。

プチッと肉が裂ける音がした。

同時に、ユキが悲鳴を上げる。

何かと思い立ち上がると、ユキが半身を起こし岩の上にいた。月光の下、細い体が震えている。

僕は慌てるが、それよりも先にユキに変化が見られた。

星明かりの下、悲鳴と共にユキの背中から、半透明の美しい羽がゆつくりと開いていく。

ゆつくりと、ゆつくりと。

あまりにも驚いて僕は動けない。

これが人間もどきなのかと息を呑む。

透き通る程薄い羽。

美しいと素直に思う。

けれどその羽はユキの背からしつかりと生えていた。

それはユキが人間ではないという明確な事実だった。

普通の人間は羽など持たない。

成長もこれ程早くない。

ユキの全てを受け入れようと覚悟していたのに、僕は何も出さない。

こんなにも美しいのに。

人間じゃなくてもいいじゃないか、と。

一緒に生きれるのなら、共存の道もあるのではないかと。そんな希望を願ってしまう。

どれだけその光景を目にしていたかわからない。

何秒だったのか、何十秒だったのか、何分だったのか。

時間を忘れてしまう程、

ユキは美しく完全に羽化した。

ピンと貼った半透明の羽はガラス細工のように美しかった。

## 真夏の夜の…

どさつという音で僕は現実世界に引き戻される。

ユキが川原に倒れていた。

慌てて駆け寄るが、苦しそうに息をしながら目を閉じていた。羽は水に塗れ、くたりとしている。

「ユキ、大丈夫？」

「……もうだめみたい」

かすれた声でユキが答える。

少し笑って、そう言った。

何も言い返す言葉が浮かばなかった。

僕はそつと体を横にする。

初めて出あった時と同じように。

違うのは、ユキの容姿と羽。

ユキの体は酷く衰弱していた。

僕にはもうどうすることも出来なかった。

手を握り、その温もりを感じることにしか、できない。

横に座り、ユキの鼓動を感じる。

「あんなこと言ってごめんね、大好きだよ」

涙を零しながら、ユキは告げた。

僕は驚かなかった。

「僕もだ」

握った手に力を込める。ユキは少し笑った。

「出あったのがあなたでよかった」

僕はその手を頬にあてる。

「そうだね」

少しだけ、話をした。

出あった時のことや、髪を切ったことや、山を歩き回ったこと。けれど段々とユキはうなずくしぐさだけでしか、

意思を伝えられなくなっていく。

別れの時が、迫ってきていた。

そしてついに、重い口をひらいた。

「そろそろ、返るね」

僕は焦る。

「まだ早いよ」

出会ってから数日しかたっていないのに、

まだたくさん話したいのに、

側にいて欲しいのに、好きなのに、

どうして。

どうして離れなければならないのか。

一緒このまま二人で暮らせれば、それだけで幸せなのに。

「返ってきなさいって」

落ち着いた声。

僕の混乱していた頭はいつきに冷静になる。

もう、どうしようもないのだ。

涙を堪える。

「また、会えるかな」

なんてことを言ってみたりした。

「私はいつもこの星にいるよ。いつも側にいるよ。だからこれはさ  
ようならじゃないよ」

「うん」

一生懸命言葉と繋げるユキ。

僕はうなずきながら両手でユキの手を包み込む。

しかしこれが永遠のさよならなのだと、僕もユキもわかっていた。  
もう、次は無いのだ。

「だいすき」

優しく笑った後、ぱたりと手が落ちる。

ああ、と僕は嘆いた。

冷たくなっていく頬をそつと撫でる。

やわらかくてさらりとしていた。

しかし触れた所からすぐに崩れて土となった。

ついに彼女は死んでしまった。

もう二度と会うことはない。

けれどいつだって側にいてくれる。

その方が辛かった。

たった数日だったが、彼女と過ごした日は

本当に一日一日が楽しくて嬉しくてたまらなかった。

僕は胸をはって言える。

ユキに出会えてよかった、彼女が好きだったと。

人間じゃなくても好きだったと。

気がつくつと、僕は泣いていた。

真夏の中での短すぎる恋だった。

> i 1 0 1 9 2 — 1 3 9 7 <



## 真夏の夜の…（後書き）

おしまいです。

ここまで読んでくださった方、本当にどうもありがとうございました。

次の作品も頑張りたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7679m/>

---

せみ少女（仮）

2010年10月13日02時12分発行